

前田知恵さん

高等学校卒業後、女優を目指して単身中国に渡り、難関の北京電影学院演劇科に初の外国人としての入学を果たす。数々の中国映画、ドラマに出演後、今日本を拠点にドラマ、CMに活躍中の前田知恵さん。その魅力のミナモトに迫ってみました

夢、その実現に向けて





Chie Maeda

PROFILE

【まえだ ちえ】1981年東京都に生まれる。1999年3月私立成徳学園高等学校卒業後、中国北京へ渡り、中日青年研修大学入学（中国語研修）、同9月北京電影学院入学（中国語研修）、同10月アニメ映画『宝蓮灯』日本語吹き替え担当（主人公役）、同11月中日合作映画『戦場に咲く花』出演、2000年3月北京電影学院演劇科合格（外国人初の本科生）、同5月中国テレビドラマ『永恒恋人』出演（理恵役）、同7月映画『紫日』主演（秋葉子役）、2004年6月北京電影学院演劇科卒業、2005年4月映画『秋雨』主演（橋本梶子役）、2006年4月～2008年3月NHK2006年度・2007年度『中国語会話』出演、2007年11月映画『北京の恋』（原題『秋雨』）日本公開、2008年2月『北京ナビ手帳』（小学館より刊行）2008年4月～文化放送『アジアン！プラス』金曜日パーソナリティ、2008年10月～NTV系テレビドラマ『OLにつぼん』レギュラー出演
資格：中国語検定2級、HSK中国漢語水平試験8級

（収録日：2008年10月14日）

——まず、中国で女優になるという一つの目標に向かって努力され、若いのにすごいなあと感心しています。そして、テレビドラマ『OLにつぼん』（日本テレビ系列水曜午後10時より）のレギュラー出演おめでとうございます。ありがとうございます。

——今はどれぐらいまで収録が進んでいるんですか。

今は三話が終わったぐらいですね。

——そうすると二週間先ですよ。

そうですね。結構ぎりぎりですよ。

——どうですか。観月ありささんとか、浅野ゆう子さんとか、ベテランに囲まれて。

観月さんとは歳が意外に近いんです。ドラマですつと拝見していた女優さんですし、阿部サダヲさん、浅野ゆう子さん、皆さん大先輩で、憧れていた方たちの中で自分も共演できたということがすごいです。それに加えて、脚本が中園ミホさん（人気脚本家）であり、ファンでしたので、『ハケンの品格』や『anego（アネゴ）』とか、日本に帰ってきてからみたドラマですけれど。そういう憧れの脚本家の方やスタッフとも一緒にお仕事できて、本当に毎日楽しく撮影ができています。

——日本と中国では撮影の進め方に違いなどはありますか。

中国では主に映画のお仕事をさせていたっていました。映画は公開までに半年や一年などすごく時間がかかる場合もあります。しかし、日本のドラマはすぐにオンエアするので、それがまたすごく楽しいです。中国のドラマは映画と似ていまして、オンエアは最後まで撮り終えてからなんです。それも二〇話以上あるんですね。全然違うと思いますね。

——『OLにつぼん』での役どころなんですけど、職場でマンガを描いている場面がありましたけれど。

私は、今回マンガ好きなOL役で、実際にあのチビ太の絵も描かせてもらいました。オタクとまではいかないの

ですが、メガネをかけた個性を少し出して、OLはOLでも、自分だけの世界を持ったような役だと思うんです。頼まれたことはやるんですが、自分からは積極的に総務課としての仕事をやるというわけではないんですよ。

——本来の自分とは全然違うんじゃないですか？

全然違うんですよ。実際の自分は、積極的な方だったので、中国に行くこととか、自分からアピールしてこの仕事をしたいとか、この役をやりたいとか言っていました。でも、逆に受け身であればあるほど、周りからも影響を受ける役というのも面白いなとも思いました。ちょうど今回は、ドラマの中で中国と日本の仕事のバトルを描いていますので、中国人からも影響を受けるという設定なんです。中国人の良さとか、そこを考え方とか頑張り方に関してすごく刺激されるんです。私ももちろん積極的な方ではあるんですけど、日本に戻ってきてからは、成り行きに任せる自分にもなってきましたので、自分の積極的な面を外から見せられる感じがしていますね。

——実際にこれからの場面の中で中国語を話すような場面とかは。

いまのところはないですね。家族は中国語をしゃべってほしいみたいですが、私としてはどちらでも良いと思っ

『ロミオとジュリエット』を 三〇回以上見たんです。



しています。私が日本で活動したいと思ったのは、日本で普通の日本人も演じてみたいという気持ちがあったからなんです。

——はい。

実際は、中国にいても中国人の役ではなくて日本人の役をやらせてもらっていま

した。そうすると、やはり日本のことについていろいろ聞かれますし、歴史でも、文化でも何でも自分が知っていなければいけないと思いました。一八歳から二四歳まで六年間中国に住んで、演技の面白さや、映画・ドラマの面白さなどをいろいろ知っていく中で、それを深め、追求するというのを日本で、日本人の役でちゃんとチャレンジしてみたかったんです。

——なるほど。

だから、今回の『OLにつぼん』の役では中国語をしゃべってもしゃべらなくてもいいと思っているわけです。

——実際、中国で女優となられて、そ

して日本で今ご活躍中ですが、若いころから女優になりたいというお気持ちは強かったんですか。

強かったですね。

——いくつぐらいからそういう気持ちをお持ちになったんですか。

中学生の時で一二歳ですね。覚えていますが、姉に一九六八年の『ロミオとジュリエット』をビデオで見せてもらって、それにすごく感動して、三〇回以上見たんです。それから女優という仕事や映画に憧れを持つようになったんです。

——それから、高校をご卒業されるまですつとその気持ちを持ち続けていたんですか。

はい。でも、私は正直、日本にいた時には恥ずかしくてなかなか人には言えなかったんです。オーディションを受けるとか、女優になりたいとかは言えなかったんです。今でも人の目を気にするタイプですし、当時はすごく引っこ込み思案だったんですよ。

——そうなんですか。

今でももちろん、たまにそんな引っこ込み思案な性格が出るんです。当時は

自分の好きなものを 正直に発見できました。

ましてそんな性格でしたのでなかなか自分を出せずにいました。高校二年、三年と受けていましたオーディションでもなかなか自分をPRできず受からなくて。このままじゃだめだと思い、進路を決める時にどうしようかなと悩みました。そんな時に、たまたま母と姉と私の三人で『宋家の三姉妹』という映画を見たんです。私にとってはそれが初めての中国映画でした。その時、中国映画ってこんなに面白いんだと感じて、その後、別の映画もビデオで借りて。また、京劇とか歴史的なものがすごく好きになり、自分の好きなものを正直に発見できました。周りが何と言おうと、私はこれがいいと思うとはつきり周りに言えるようになったんです。

——実際に、前田さんが『ロミオとジュリエット』をご覧になっていて、そして高校三年の時に中国の映画をご覧になって、そして、まずは日本ではなく、言葉もできない中国に渡って、そこで自分として鍛えようというか、女優になろうと。その時点ですでに中国の女優を目指されて行かれたわけですか。

もちろん女優になるという夢はあつ

言葉の壁さえ乗り越えたら……



北京電影学院演劇科卒業式
前田さんは最前列左から9番目

(※)

	第1声	第2声	第3声	第4声
例	妈	麻	馬	罵
構造図	→	↗	↘	↘
意味	お母さん	麻	馬	叱る

たんですけれど、その時はまだ少し漠然ともしていました。

——なるほど。

でも映画が好きでしたから、調べてみたら北京電影学院（以下電影）とい

う映画学校があつたんですよ。チェン・カイコーやチャン・イーモウなど、私が憧れる監督さんや俳優さんが出ている学校があると知り、そこに行けば、その人たちと同じようなことを学べますし、中国人と一緒に演技を学びたかつたんです。一緒に映画を学び、一緒に作品を作りたい、一緒に映画に出演したいと思ったんです。その時は、ただそれだけだったんです。

——それ以前に観光などで中国に行かれたことは。

一回もないんです。

——そうですか。

一回もないですし、中国という国に関して、すごく興味があつた訳ではないのに、なぜか……。今中国はすごく注目されていますけれど、当時はそんなでもなくて。特に私の高校時代、中国映画は地味だという感じであり、その良さを理解されていないあとだったんです。

——確かにそうですね。

中国映画の良さを私はすごく感じていたのに、あれっ、と思つたんですよ。ギャップを感じたんですね。同じアジアなのになぜだろうと純粹に。それから、言葉の壁さえ乗り越えたら、言葉さえ出来たら、もしかしたら同じ舞台や映画とかを一緒にできるんじゃないかと思いました。

——ひらめきもあり、それが中国という感じだったんでしょうね。ただ、私の想像ですけれど、中国語の難しさを知らなかったから、逆に良かったのでは。今考えてみますと、難しいですよ。

——私もほんの少し中国語ができますが、今でも四声（例えば、同じ「マ」でも抑揚により、意味が異なる）なんて正しく発音できないですよ。（※）

——そうですね。

——それでも、よく短期間で母国語並みのレベルまで到達されたなど。やはり若くて……。

やはり若さがあつたのかもしれないです（笑）。思い込みも強かったですし、語学は環境が一番大事だと私は思っていましたので。とくに中国語は発音が違いますから。それに日本語と同じ漢字を使っているややこしいじゃないですか。でも、日本にいた時から漢字に興味があつたんです。語学はゼロからの方が覚えが良いと思っていましたので、高校を卒業して、もう四日後には中国行きの飛行機に乗っていました。

——日本から行かれた時はどれくらいのレベルでしたか。你好（ニーハオ…こんにちは）とか。

你好と謝謝（シエシエ…ありがとう）、再見（ツァイジイエン…さようなら）、辛苦（シンクウ…お疲れ様）という四つだけです。



目標があつたから、頑張れた

学校で語学を勉強されたのは。一年でどうしたらそんなに上手くなるんですか。特に女優さんとしては生活に根ざした言葉というのは、絶対に身につける必要がありますし、本当にその世界に入り込まなければできないと思います。たとえば、入り込んだとしてもどうやって勉強されたのかなど。

——そうですね。変わられてきていますよね。

目標があつたからです。それも具体的に電影の本科に入るという目標が。

——もうその時点で本科に入る目標をお持ちになっていたと。

本科に外国人は誰もいないよとまず言われました。入りたいと思って先生に言いましたら、いいよ、と許可を得ましたので、あとはHSKだけということでした。やはり勉強してというのはありますよ。

——HSKというのは。

今では日本でも受けられるようになった試験ですけど、語学検定ですね。三、四、五、六、七級となり、八級が一番上で、またその上も一〇級ぐらいまであるんです。それで六級以上ですと大学入試に使えるというラインがあるんですね。それを一年で身につけなきゃい

——对不起（トウイプチ：すみません）とかは。

全然知らなかったです。本当に知らなかったです。すみませんという言葉さえ言えなかったんです。

——本当ですか。よく行きましたね（笑）。びっくりしちゃう。だから、最初に語学の大学に。

はい。一応日本人の団体（留学）で行ったんです。全部で一五人ぐらいいましたので心配しなかったですね。皆、北京に来るのは初めてで、日本人だけのクラスでしたので。でも、先生は中国人で日本語も英語も話せない先生だったんですよ。

——それはいいことでしたね。

はい、すごく勉強になりました。

——それから一年間ですよ。実際に

けなかったもので、大変でした。最初の三カ月は三、四級も受からなかったんですよ。でも、残りの半年は電影の漢語班で勉強していたので。

——そうですね。変わられてきていますよね。

今度は日本人しかない環境ではなかったですから、私は中国人の友達を作ってそこからまた新たな中国人の友達を作って、先輩から話を聞いたりして、ほとんど日本人とは話さないぐらいになつていたんですよ。やはり中国で女優を目指すということは、思考回路までも中国人にしなければ、そういう話し方にならないと思つたんです。中国語を話していても日本人の感覚で話していますと、日本人が話している中国語のように堅くなっちゃう。中国人と常に一緒にいて、何でもこんなことを言うんだらうとか、この言葉はどうやって生まれたんだらうとか考えて。中国語は奥が深いから楽しかったですよ。もちろんギャグとか、中国と日本は違うじゃないですか。笑いのツボが。だったら、一度日本の感覚を捨ててみようと思ひ、完全に入り込んでいます



映画『北京の恋』における
京劇のシーン、右が前田さん



映画『紫日』の
ワンシーン

したね。

——いい意味でワイルドになられて。
あの国は、前に前に出て行きやすい国
ですね。

そうだと思います。アジア全般そう
いう傾向が強いですけど、しゃべら
ないと逆に相手にされないというのがあ
ります。言いたいことを言うことによっ
て、お互いうまく仲間になれるという
感じ。ぶつかっても、それは一時のこ
とですぐに仲直りできたりします。そ
の時は感情的なんですけれど、ストレ
スがたまらない。言いたいことが言える
という環境が、自分にすごく合ってい
て、本当の自分を発見しちゃったよう
な感じでした。

——実際に『OLにつぼん』を見てい
ましても、あの二人の中国人は、思っ
たことをストレートに言っていますよ
ね。だけど、純粋な日本人にはそうい
った部分はちょっと理解できないかな
という部分はありますね。私はああい
う人たちは好きですよ。不必要なま
で行間の意味をくまなくてもいいです
ね。

まさにそうですね。

——先日の『OLにつぼん』一話の放
送に対するご家族、ご両親だとか、ご
兄弟の反応はどうでしたか。

そうですね。母と姉は「もうちょっ
と出てきてほしい」と正直言っていま

した（笑）。今まで自分が中国で主役
もやっていましたのを家族は知っていま
すので。

——私もそう思いました。

（笑）。これからもう少しずつ増えて
いきます。家族は普段の私をとってもよ
く知っていますので、ドラマの役どこ
ろは普段の私と違うらしく…、びっく
りしています。ところが私としてはやは
り自分と違う役をやるのは楽しいです。
中国の映画の中では、どちらかとい
いますと自分のキャラクターとかを反映
してもらうことが多かったんです。

——具体的にはどういうことですか。

例えば、『秋雨』（原題）という映画、
『北京の恋』（邦題）が日本でも上映さ
れたんですけど、それは京劇を学び
に日本から北京まで来たという女の子
の役でした。その設定と実際に、一人
で中国に渡って行った私の積極的な性
格がリンクしてその役に選ばれていると
思っています。すごく似た部分があって、
家族にもやはりそういうふうに見られて
いると思うんです。だから、母は、映
画の中で私が悲しんでいるから、かわ
いそうと思っちゃうんですね。『紫日』
という映画も私が死んじゃったとか思
ったりして、そういう役を演じているだ
けなのに。でも、最近日本で出ている
ものを見ると、例えば、CMもそうで
すけれど、何か違う自分として見てく

れるようになってきたかなとうれしく思
っています。

——ご家族もそうだし、前田さんも。

自分でもそうです。やはり違う自分
というよりは、役柄をきちんと演じら
れた方がはるかに楽しいんです。いつ
もの思考回路と変えてみたりするとか、
仕草を変えてみたりするとか。また、
いつもの自分が出ちゃったりする場合
もあったりするんですけど、そういう
のもすごく好きなんです。二〇〇四年
まで中国に拠点を置いていまして、そ
して、今は日本にベースを移しています。
やはりいろいろな役をやってみたいとい
うことにつきます。だから、せっかく中
国で経験を積んできたのにもったいない
という人が、日本でも中国でも多かつ
たんですけど、私はあえて日本で活
動したいと思ったんです。だから日本
でいろいろな作品に出演させてもらえ
ることは、今、本当にうれしいです。

——考え方としてはどうですか。

一九九九年に中国に渡られて語学がで
きるようになって、そのあとの女優生
活。そして、日本に戻られてからの女
優生活。少しずつ変わってこられてい
ると思うんですけど、どういう変化
がありましたか。

変わってきていますね。日本と中国
の架け橋として女優をやりたいと思っ
たこともあります。また、日本に帰っ



北京旅行のお伴にいかがですか。
前田知恵さんがナビゲートする
『北京ナビ手帳』小学館発行

いつもの思考回路と 変えてみたりする

てきまして、NHK『中国語会話』だったり、中国語を使った仕事をさせてもらうことが多いので、それは活かしていきたいです。最近、中国に行つて帰ってきますとギャップは結構大きかったりしますね。例えば、日本の方は丁寧ですし、やはりいいところだなと思うんですね。親しき仲にも礼儀ありじゃないですけど、そういう美德というか、道徳はすごくいいな、素敵だなと思います。でも、日本では、遠慮気味な性格にやはり戻っちゃう（笑）。何ででしょうかね。

——例えば、日中の懸け橋とはどんなイメージの活動を考えていますか。

さまざまな分野で日中の懸け橋として活躍されている方がいます。常に中国と関わっていききたいですし、やはり日本と中国はずっとこれからも友好的に、ビジネスでも、エンターテインメントの世界でももっとと交流し、共に力を合わせていけたらなと思います。ずっとそれは思っていることですね。

——分かりました。実際に中国で生活されていた時、語学の学習をされていた時と、それから俳優の学校

に行かれていた時というのは日々どんな生活をされていたんですか。

語学の時は午前中に中国語の勉強をしたら午後は復習みたいな感じで結構ゆとりもありました。自由でしたから、慣れるために街をいっぱい歩いたり、買い物に行ったりとか。しかし、電影に入ったらそれどころじゃなくなりました、セリフの宿題が出され、中国人の生徒は一日で覚えられるんですけど、私の場合は辞書で調べながらピンイン（中国語の発音記号）をふつて三日ぐらいかかっちゃうんですよ。それを繰り返していました。いつも勉強していたと思います。でも、友人と遊びに行くという時は、山登りに行ったりとか、カラオケに行ったりとかして気分転換しました。

——きっとそんな感じで中国語を身につけられたんでしょうね。

そうですね。留学生の中でも、目標がやはりある人となない人ですぐに分かれていますでしたね。すぐに日本に戻っちゃう人もいました。また、ずっといる人の中でも、やはりどこかそこまでは中国に染まらないという人もいましたし、どっちがいいという訳ではないんですけど、私の場合は染まる方を選んで。

——どっぷりですか。

どっぷり（笑）。

——だから、今があるということですか

ね。

日本語も忘れちゃうぐらいだったらしく。母との電話だけでしたから。

——日本語が出なくなっちゃうんですね。言語の周波数も違いますから。英語だけを一カ月使ったりしていますと日本語が分からなくなっちゃう。誰かが間近で日本語をしゃべっているのに聞き取れない。ありますよね。そういう感じというのは、間違いなく。

分かります。日本語が出てこないんですよ。今、文化放送のデジタルラジオで週に一回『アジアン！プラス』という番組のパーソナリティでアジアの情報を紹介させてもらっているんですけど、原稿も中国語を入れたりして工夫しています。またドラマの空き時間にも、中国人とは中国語でしゃべっています。たまに中国にいる友達とメールや電話での連絡もします。でも、やはり語学というのは伸びるためには絶対に勉強しなきゃいけないと思うんです。今は、私も落ちていると思います。正直。

——勉強し続けないと。

勉強し続けないと語学は伸びないと思います。忘れはしないと思うんですけど、新しい単語とかは、やはり日本にいても勉強しなきゃいけないと思いますから電子辞書は欠かせないです。分からない単語があつたらすぐに調べる習慣はついています。



現地に染まる方を選んでみました。

——それは大事です。実際に中国で約六年過ごされたご経験もあって、NHKの『中国語会話』にも二年間アシスタントとして出演されたわけですね。

今後の抱負、例えば女優としての夢でもいいですし、前田さん個人の夢でも、お聞かせください。

それがあるんですよ。すごく大きな夢が。でも、ごめんなさい。言いたくないという気持ちがいりあるんですよ。なぜか。

——願い事をしつかり紙に書いて人に見せず、言わずに箱に折りたたんで入れておくと、必ず願いは叶えられるというんです。だから、言わないのは正解かもしれないですよ。

そうなんですね（笑）。分かる気がします。言っちゃうよりは、本当に自分が思っているかどうかが大事ですし、そうですね。

——でも、きょう家に帰って……。

実は書いてあります。すでに書いて家に置いてあります（笑）。でも、そうなんですか。

——ジョセフ・マフィーとか、潜在意識に訴えて思いを実現する類の自己啓発本にはそう書いてあります。

みなさんそうされているんですか。

——どうでしょう。私は人にペラペラ言うから、なかなかかかないですね。

（笑）

——ところで、「兄弟も海外志向だというふうにお聞

きましたんですけれど。

そうですね。姉もイギリス留学してからずっとそのあと、フィンランドにいます。向こうの音楽大学を出ています。姉はハープ奏者をやっています。弟はオーストラリアで調教師の助手をやっています。

——へえー。やはり家が。

そうですね。もうみんなグローバルになろうって。母がそうだったんですよ。特に母はこれからは世界へ、という感じで。姉はヨーロッパ、弟はオーストラリア、私が中国と、すごく応援してくれまして。でも、父は実際、反対でした。

——心配。

そうですね。一人娘ではないですが、目に入れても痛くないと言って目に入れてみたぐらいの父だったので（笑）。見送りの時、成田空港で寂しそうでした。

——それは分かりますよ。私も中学生の娘がいますし。でも、やはり出ていくことって、すごく成長になると思いますよ。

なりますよね。

——最初は言葉もできない国で過ごされたということだけでも、どんどん応援していると思います。今日は、本当にありがとうございました。

こちらこそ、ありがとうございました。（インタビュー…協会職員 竹内敦）